

庄野潤三全集

庄野潤三全集 第七卷



昭和四十九年一月四日 第一刷発行

著者 庄野潤三

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二丁目二番一郵便番号 一三二一
電話 東京〇三三九四五二二（大代表）・振替 東京三九三〇

印刷所 図書印刷株式会社・株式会社興陽社

製本所 大製株式会社

製函所 株式会社岡山紙器所

定価 一六〇〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
©庄野潤三 昭和四十九年 Printed in Japan

庄野潤三全集 第七卷
目次

前
途

紺
野
機
業
場

庄
野
潤
三
ノ
ー
ト

阪
田
寛
夫

7

239

484

装　　幀・岩　本　正　雄
口絵写真撮影・野上　透
（昭和48年3月、自宅の庭にて）

庄野潤三全集 第七卷

前

途

第一章 ラム研究会

十一月二十三日 箱崎

朝がた、一度、目を覚まして、

「ああ、今日は新嘗祭だったな」

と思つて、しばらくぼんやりしていたが、それからまた眠つて、今度起きると、もう十一時になつていた。

はじめに目を覚ました時は、曇つたような朝の光が部屋の中にあつた。二度目に起きた時、外は大へん暖い、いいお天気であつた。

僕の財布には、九銭しか残っていない。だが、こんな日に下宿の北向きの部屋でじつとしていられるものではない。飯を食つてから、外へ出た。

網屋町から電車に乗つて、行先を平尾と決めて、切符を買つた。祭日で、街は人出が多い。僕は、南薬院で電車を降りて、平尾の貯水池の方へ向つてゆっくり歩き出した。

このあたりへ来ると、人は誰も歩いていないので、僕は呑気に歩いた。道のそばの野原で、奥さ

んと洋装の娘さんと二人で、休閒地を開墾して畑をつくっている。僕が娘さんの方をみたら、娘さんも僕の顔をちよつとみた。

僕は、五月に陽子から来た手紙のことを思い出した。あれは、僕がまだ薬院大坪町の最初の下宿にいた時だ。その手紙には、うらの畑の薔薇やシヤスター・デイジーが盛りで、芍薬の蕾もふくらんで来て、いま、花園のようです。昨日は茄子を植えたので、今年の夏は、毎朝、茄子を食べることが出来るので楽しみですと書いてあった。

そうして、封筒の底からシヤスター・デイジーのしおれた花が、ひとつつ出て来た。

シヤスター・デイジーなど、庭にいっぱい咲いているところを眺めてこそ美しいので、こんな風にひとつちぎって送ってくれても、大して有難味はない。

しかし、生れて初めて下宿住いをしている兄を慰めようという気持は分る。で、そのシヤスター・デイジーを、僕は掌の上にのっけたり、鼻の先へ持って来て匂いをかいでみたりした。

休閒地農園を耕している娘さんは、陽子よりも少し年上のように見えた。(妹は、女学校の四年生だ)

貯水池へ上る坂道は、紅葉した木が両側に続き、向うに福岡の街が眺められて、いいところであった。僕より少し先に登り着いた家族連れがいて、両親と小学生の男の子と女学生の四人で、見晴しのいい場所にまゐるくなって、これからお弁当にしようとしている。僕は、しばらくそれをみていた。少し羨しい。

上まで登ってしまうと、別に何もないので、下りた。帰りは森の中の道を通って、いい加減に歩いていたら、はじめにいた下宿の近くへ出て来た。この舗装した広い道を、ふた月通ったんだなと思う。

あれから僕は二度、下宿を変った。五月の末に六本松の、高等学校の裏手にある家へ、九月に箱崎白浜町のいまの家へ、布団包みと机と大きなトランク一個とともに引越したのであった。

この広い道を歩いていると、まだ入学して間のない頃、電車通りの花屋で鉢植の紫陽花を買った時のことを思い出す。花屋の主人は、これからまだまだ一月くらいは咲きますと云った。僕はその鉢植を大事に抱えて、桜の花びらのような色の花がゆれるので、ゆっくりゆっくり歩いて下宿に帰り、机の上に置いた。

黄山谷が東南第一花と讃えた玉簪花とは、どんな花だろう。この紫陽花をみていると、ちょっとそんな感じがすると、僕はひとりで考えたものだ。朝、露台の水道から海苔の空罐に水を汲んで来て、いっぱいかけてやって、それから学校へ出かけた。

家族の多い家に大きくなった僕にとっては、そんなちょっとしたことが珍しかった。玉蜀黍入りの盛り切りの飯と少いお菜で、いつもおながすくのものには閉口したが。

赤坂門の電車通りに近くなると、楽隊の音が聞えて来た。いっぱい人だかりがしている。僕もその中にまじって見物した。

向うから若い女の子の鼓笛隊がやって来る。株式会社丸永商店女子部鼓笛隊と書いたものを、先頭の子が押し立てている。あまりきれいな子がいないのは、残念だ。少し間隔をおいて、次々とやって来た。女子の鼓笛隊が三つばかり通り過ぎると、今度は男子の吹奏楽隊が、威勢のいいひびきを立てて来る。仙台市東北中学校、名古屋市東邦商業、大宮市東京鉄道大宮支部報国隊……。

遠いところから来ているのだなあ。何があったのだらう。中学のも会社のも、先頭で指揮棒を持って胸を反らして進んで行くのは、みなかなりの年輩の人である。それが、恰も指揮刀を手にした将校のように歩く。

先の方をみると、はじめに行った女子の鼓笛隊が、いま勇しくお濠の橋を渡って行く。まだ後からやって来るが、こういうのをみていると、いつまでも飽きないので、浜の方へ歩き出した。同じ東洋史の鈴木のところへ行つて、帰りの電車賃を一銭、借りなくてはいけない。

アパートの下から呼んだら、いい具合に彼は部屋にいた。火鉢のそばにあつ子ちゃんと一緒に坐っている。

「昨日も今日も、一日、こうして家にすつ込んでいたよ。それがいちばんエネルギーも金も要らないからな」

そう云つて、彼は笑つた。

鈴木は、僕なんかと違って、奥さんもあるし、六つになる女の子がいる。彼は、千葉県で小学校の先生を何年かしていて、それからもう一度勉強する決心をして、大学へ入つたのである。

夏休みまでは箱崎の下宿で自炊していたのだが、九月にこのアパートへ引越し、国もとから呼び寄せた家族と暮すようになった。

彼がまだ箱崎にいた頃、或る晩、僕が下宿を訪ねると、蚊帳の中で、寝たまま、両手で団扇をゆつくりと動かしている。蚊帳の天井が垂れ下つて、顔の真上に来てゐる。そこに何か載せてあつた。いったい何をしているのかと思つたら、彼はわけを話してくれた。次の日に教練で行軍に行く。晩御飯の残りを弁当に詰めるつもりでいるが、何しろこの暑さでは御飯がいたみそうなので、御飯を箆に入れて、蚊帳の天井にのせ、下から団扇で煽いてゐるというのだ。

「何とかもたせなくっちゃいけないんでね」

そう云つて、鈴木は笑つた。

いまは、あんなことはしなくても済むだろう。だが、どこからも金が入つて来るわけではなく、

卒業するまではこれまでの貯金を食いつぶしてゆくのだから、よほど引締めてかからないといけない。僕らのように親の仕送りで大学へ来ている者とは、心構えもまるで違う筈である。

あつ子ちゃんが一週間前から腎臓炎になって、顔の腫れは大方引いたけれど、まだ少し蛋白が下りるらしい。僕は、安静にさせなくてはいけないということを鈴木に云った。僕自身、中学一年の時に風邪から腎臓炎を起して、せっかく蛋白が無くなるところまで行ったのに、すぐに起きて外へ出たり、食事をもとに戻したので、一週間ほどでまた蛋白が出るようになった。僕はそのため一年間休学した。

そういう苦い経験があるので、鈴木に養生をどうすればいいかという注意をして上げた。

「そうかい。いや、それは有難う。食餌療法のことは医者に云われたが、安静にするということは知らなかった」

と鈴木は云った。

それに尿量が少いというので、どんどん煎じ薬を飲ませるなりして、すっかり蛋白が無くなるまでやらないと、もしも慢性になったら大変だということを、僕は念を入れて云った。

話し込んでいて、もう帰ると云ったら、夕飯を食って行けと云う。隣りの間から奥さんが、「もう支度していますから、上って行って下さい」

と声をかけたので、そうすることにした。

だいぶ暗くなって、朝昼兼用にした僕のおながひもじくなって来た頃、御飯が出来た。いかの天ぶらの井と豆腐の味噌汁と、

「昨日、肉の配給があつてすき焼をやった。もう肉は無いけど、その残り」

と、白菜の漬物で、御飯はお国の千葉から送って来た真白のお米で、おいしかった。

勧められるままに腹いっぱい食った。

「この子が漆山さんに泊って貰ってと云いますのよ」と奥さんが云った。

御馳走さまでしたとお礼を云って、鈴木夫妻と別れた。外は冷えていて、オーバーなしで出て来た身体に寒さがしみる。

赤坂門から電車に乗って、

「あ、一銭借りるの忘れた」

と気が附いた。御飯を呼ばれて、すっかり忘れてしまっていた。

次の停留所で僕は、財布を忘れたからと云って降してもらい、空に十六夜の月を仰ぎながら、歩き始めた。川端通まで歩いて、哲学科の養田の家へ行った。養田は福岡高等学校の出身で、家は印刷屋さんをしている。

有難いことに、彼は家にいた。二階へ上り、わけを話した。

「今度はもう一銭、忘れんごとしとかないかな」

そう云って、彼は笑った。

「今日、漆山さんそこへ行こう思いつて、弟がどこかへ行こう云うもんやから、そうすることにしたたら、また弟が行かん云うて、結局ひとりで春日原^{はるの}へ行つて、ぶらぶら歩いて来た」

と云った。

中学へ行っている弟さんは、二人とも部屋の向うでもう自分の床を敷いて、寝かけていた。小学生の弟は、こちらを向いて僕らの方をみていたし、女学校へ行っている妹は、机に向って勉強していた。